

ト マ ト (露地) (黒ボク土)

〔土壤肥料〕

本作目は、栄養生長と生殖生長が同時に進行する型である。窒素をはじめ養分を生育後期まで供給する必要があり、収穫後の土壌には養分が残存しやすい。そのため、他作目との組み合わせなどを図り、残存養分の過剰な蓄積を回避する必要がある。なお、リン酸については広域適応性があり、低含量にも適応することに留意して、施肥設計をたてる。

〔病害虫・雑草防除〕

土壌病害対策として、萎凋病・半身萎凋病・ネコブセンチュウ抵抗性品種の作付けを基本とし、青枯病や褐色根腐病等の発生圃場では耐病性台木を利用する。灰色かび病等に対しては耐性が低いので、花弁残さや罹病果の早期除去等の耕種的防除に留意する。育苗期には防虫ネットの被覆等を行って害虫の被害を回避し、圃場に害虫を持ち込まない。天敵等の生物農薬を導入し、化学農薬の使用削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	<p>土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。</p> <p>肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用に当たっては長期的な視点に立った投入量管理を行う。</p> <p>緑肥作物を利用する。</p>	<p>堆肥 2～3t/10a</p>
化学肥料 低減技術	<p>基肥は局所施肥(条施肥など)するとともに、窒素、カリについては追肥型の施肥法をとることを基本とする。</p> <p>肥効調節型肥料と速効性肥料とを組み合わせ、養分吸収特性に対応した施肥成分の供給を行う。</p> <p>有機質肥料による施肥を行う。</p>	<p>成分量で施肥基準以下</p> <p>有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20～50%</p>
化学農薬 低減技術	<p>微生物農薬を利用する。 (対象:灰色かび病、うどんこ病、ネコブセンチュウなど)</p> <p>B T剤をローテーション散布に位置づける。 (対象:オオタバコガ、ハスモンヨトウなど)</p> <p>対抗植物(クロタリリア、ギニアグラス等)を利用する。 (対象:ネコブセンチュウ)</p> <p>抵抗性品種、抵抗性台木を利用する。 (対象:萎凋病、青枯病など)</p> <p>育苗期に防虫ネットによる被覆を行う。 (対象:アブラムシ類など)</p> <p>被覆資材により雨よけ栽培を行う。 (対象:葉かび病など)</p> <p>光反射マルチを利用する。 (対象:アブラムシ類、雑草など)</p>	<p>慣行使用回数の 20%減</p>
その他の 留意事項	<p>生育後期の養分供給と良好な根系発達を確保するために、下層施肥(深層施肥)も有効な施肥法といえる。この場合には堆肥と有機質肥料などを混合し、下層に条施することが有効である。</p> <p>水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保などを図るとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。</p> <p>長期栽培の施肥量は、収量目標を一応の目安として増加させる。</p> <p>盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。</p>	

ト マ ト (施設) (黒ボク土)

(土壌肥料)

本作目は、栄養生長と生殖生長が同時に進行する型である。窒素をはじめ養分を生育後期まで供給する必要があり、収穫後の土壌には養分が残存しやすい。そのため、他作目との組み合わせなどをはかり、残存養分の過剰な蓄積を回避する必要がある。また、窒素過多で尻ぐされや着果不良になりやすい点にも注意する。

(病虫害・雑草防除)

土壌病害対策は、抵抗性品種の作付けを基本とし、青枯病や褐色根腐病等の発生圃場では、耐病性台木を利用する。灰色かび病等には施設内の環境を適正に維持するとともに、花卉残さや罹病果の早期除去等の耕種的防除に留意する。生物農薬や受粉昆虫(マルハナバチ)を導入し、化学農薬の使用削減を図る。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材施用技術	<p>土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。</p> <p>肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点に立った投入量管理を行う。</p> <p>緑肥作物を利用する。</p>	<p>堆肥 2~3t/10a</p>
化学肥料低減技術	<p>基肥は局所施肥(条施肥など)するとともに、窒素、カリについては追肥型の施肥法をとることを基本とする。</p> <p>肥効調節型肥料と速効性肥料とを組み合わせ、養分吸収特性に対応した施肥成分の供給を行う。</p> <p>有機質肥料による施肥を行う。</p>	<p>成分量で施肥基準以下</p> <p>有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20~50%</p>
化学農薬低減技術	<p>天敵農薬を利用する。 (対象:ハモグリバエ類、コナジラミ類など)</p> <p>微生物農薬を利用する。 (対象:灰色かび病、うどんこ病、ネコブセンチュウなど)</p> <p>B T剤を利用する。 (対象:オオタバコガなど)</p> <p>対抗植物(クロタリヤ、ギニアグラス等)を利用する。(対象:ネコブセンチュウ)</p> <p>流動性被覆資材や近紫外線除去フィルムを利用する。 (対象:灰色かび病、アザミウマ類など)</p> <p>開口部やサイドを防虫ネットで被覆する。 (対象:アブラムシ類など)</p> <p>育苗期に防虫ネットによる被覆を行う。 (対象:アブラムシ類など)</p> <p>夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 (対象:病虫害、雑草)</p> <p>抵抗性品種、抵抗性台木を利用する。 (対象:萎凋病、青枯病など)</p> <p>非散布型農薬含有テープを利用する。 (対象:コナジラミ類)</p> <p>黄色蛍光灯を設置する。 (対象:オオタバコガ、ハスモンヨトウなど)</p> <p>光反射マルチを利用する。 (対象:アブラムシ類、雑草など)</p>	<p>慣行使用回数の 20%減</p>
その他の留意事項	<p>生育後期の養分供給と良好な根系発達を確保するために、下層施肥(深層施肥)も有効な施肥法といえる。この場合には堆肥と有機質肥料等を混合し、下層に条施することが有効である。</p> <p>水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保などを図るとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。また、大量の灌漑水による除塩は慎み、クレーニングクローブを用いた除塩を心がける。</p> <p>盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。</p>	